発達理論の学び舎

Back Number: Vol 112

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2019

目次

2221. 作曲実践における工夫

2222. 深い霧の朝に

2223. 気温の恩恵

2224. 研究と社会への関与

2225. 春の訪れを感じながら

2226. 相互発達の生起する場

2227. 船旅への憧れ

2228. 二つの不思議な夢

2229. 夢の解釈

2230. インターン十日目を迎えて

2231. 活気の良い朝

2232. 小雨降る土曜日の朝に

2233. 研究インターンの今後の流れ

2234. 期末評価の季節:フィードバックと発達段階

2235. 構成的意識の中で

2236. 絵画作品と人間として生きる日々

2237. 霧と白い光り

2238. 哀しみの共有

2239. 感覚的発見事項と対話空間

2240. 内省能力の発達・組織開発など

© YOHEI KATO 2019

2221. 作曲実践における工夫

そういえば今朝の六時半頃に、何気なく食卓の窓越しから外を眺めると、すでに一日の活動を始めている多くの人たちの姿を見かけた。その時間帯にはすでに明るくなっており、目の前の通りを自転車で行き交う人たちの姿を多く見た。フローニンゲンの寒さも徐々に和らぎ、氷の世界から脱却したためか、道を行き交う人たちの表情もこれまでに比べて明るく見えた。

太陽が完全に昇り始める頃、自分の内側のシャドーの光り輝く側面が自分を強く支えていることに改めて気づいた。それはここ最近感じていた気づきでもある。シャドーの闇の側面ではなくシャドーの持つ光り輝く側面が自己の内側に顕現し、それが仕事にせよ表現活動にせよ、自己の活動の根源的な力になっているようなのだ。

昼食前に協働プロジェクトの仕事を終え、昼食後に少しばかり作曲実践をした。ここ最近特に私が意識しているのは、過去の偉大な作曲家が残した楽譜とどのように向き合っていくかということである。より具体的には、彼らの作品をいかように分析し、分析から得られた事柄をどのように自らの作曲実践に適用するのかということである。今は必ず参考にする曲をまず何回か繰り返し実際に聴くようにしている。その後、楽譜を分析的に見ていく。とりわけ、コード進行やメロディーラインなどを中心に楽譜を解析的に見るようにしている。

転調やハーモニーに関してはまだまだ学習中であるため、その辺りを全て把握仕切ることは難しいが、あるだけの知識を用いて楽譜から構造的なパターンを見出すようにしている。そのようにして把握されたパターンをもとに自分の曲を作っていくというのが次の手順である。この際に、発見したパターンをそのまま活用することもあれば、あえてそれを自分なりに工夫して用いることもある。そこに関しては何か明確な基準というのはなく、感覚的に工夫をした方が良さそうだという判断や、実験的に工夫をした方がいいと判断するようにしている。このように工夫をしながら自分で曲を作った後に、それを何度か聴き、原曲との差を比べるようなことも行う。

こうしたことを繰り返しているうちに、徐々に作曲家が用いているパターンを自分でも活用することができるようになり、自分の作曲技術の幅が広がっていることを実感する。工夫や実験を行う際は、遊び心や仮説検証の姿勢を忘れないようにしている。そのようなことを意識しながら毎日作曲実践に

励んでいる自分がいることに気づく。今夜もまた少しばかり作曲実践に従事して一日を締めくくりたいと思う。フローニンゲン：2018/3/6（火）20:26

2222. 深い霧の朝に

今朝はいつもより少しゆったりと六時半に起床した。起床直後の部屋の温度は低くなく、湯船に浸かることをせず、シャワーを浴びてから一日の活動を開始させることにした。

ちょうど七時頃から今日の活動を始めた時、書斎の窓の外は一面霧に包まれていることに気づいた。とても深く白い霧が今もまだ辺りを覆い隠している。

雪景色とはまた異なる幻想的な世界が今この瞬間に広がっている。街路樹に植えられた裸の木々とその向こう側に見える赤レンガの家々がぼんやりと佇んでいるのがかすかに見える。そのような景色を眺めながら、今朝方の夢について思い出していた。

今朝方の夢は二つの部分に分かれていた。最初の夢は、小中学校時代の友人と高速道路をドライブする内容だった。ドライブと言っても普通の車ではなく、枯れ草を運ぶような荷台を三つ連ねて、三人が各々一つの荷台に乗って高速道路の上を移動していた。その速度は歩く速度よりも遅いぐらいであった。

高速道路の端をゆっくりと走行し、時にスピードを上げるために、端にある手すりにつかまり、私たちはそれを押し放すことによって速度を上げようとしていた。高速道路の中腹に差し掛かると、大きな坂道が現れた。

先頭の荷台に乗っている友人が、走行するエネルギーが切れ始めたのか、速度がさらに遅くなった。そして、突然彼の荷台が止まった。真ん中にいた私と一番後ろの荷台に乗っていた友人は先頭の友人の様子を心配し、一度荷台から降りて彼の様子を見ることにした。どうやら、十分な食事を撮っていなかったらしく、エネルギーが切れてしまったようだった。私たちは走る順番を変えることにし、そこで夢の場面が変わった。

次の夢の中では、大きなワークショップ会場に私はいた。そこで行われていたのはワークショップではなく、大学に入学するための選考であった。私はある大学院に客員研究員として募集をしていた。まさにその大学の選考会がそこで行われており、学科長が色々と話をしていた。

私は修士課程でも博士課程でもなく、客員研究員としてのポジションに応募していたのだが、選考基準はどれも同じだったようだ。一言で述べれば、学科長が大切にする資質と能力を備えているかどうか、そして学科長自身がこれから高めていきたいと思っている能力を有しているかどうかだった。

合計で600人ほどの応募があったらしく、私は幸運にも採用者の10名に入った。学科長はその場で採用者の名前を呼び、私の名前は三番目に呼ばれた。

学科長:「明日正式にメールで通知しますので、少々お待ちください」

そのように学科長が述べると、一堂は部屋から解散し始めた。部屋から出る前に、私は学科長に一言だけ挨拶をしに行った。

ちょうど学科長が誰か別の人と話をしていたため、私は少し距離を空けて別れの挨拶だけを述べた。するとその学科長は、ジェスチャーで私の挨拶に答えた。

かねてから研究を続けたいと思っていた大学で採用されたことは、私にとってとても喜ばしいことだった。少しばかり興奮した状態で、歓喜の中その会場を後にした。そこで夢から覚めた。

夢から覚める直前、歓喜の中で会場を後にしている時、私の横には韓国人か中国人の友人がいた。二人であれこれと話をしながら、人混みをかき分けながら歩いていた姿が脳裏に焼き付いている。しかし、どのような話をしていたのかは覚えていない。

フローニンゲンの朝はまだ深い霧に包まれている。ゆっくりと今日一日の活動を開始しようと思う。フローニンゲン:2018/3/7(水)07:29

2223. 気温の恩恵

気温が少しずつ暖かくなってきていることを肌で実感している。ここ最近は、気温に関することをほぼ毎日何かしら文章にしているように思う。たかが気温と思うかもしれないが、文章にしようと思わせる何かがこの現象の中に潜んでいるようなのだ。書かずにはいられない、言葉を紡ぎださなければいられない何かが気温の中にある。

もしかすると、気温の変化は私の変化を支えている存在、もしくは見守っている存在であり、私にとって非常に大切な存在なのかもしれない。だからこうも毎日気温について何かしらの文章を書き留めているように思う。

やはり自分にとって重要なことの中には、文章を書こうとする強い意志が根付いているようだ。それともう一つ、こうした気温の小さな変化に対しても敏感に感じられるようになった自分の感性の変化と心のゆとりというのも忘れてはならないだろう。

欧州での生活が始まってから、徐々に私の感性も変化していったように思う。どのような点においてどのように変化したのはかはあえてここで書かないが、そうした変化の過程については過去の日記を遡ってみると自分でもすぐにわかる。

自らの感性が変化し、外により開かれ、内により深く入っていくような感性が醸成されるにつれて、気温の変化を含め、身の回りに遍満する、絶えず変化している現象に対してとても敏感になっているように思う。こうした感性の変化が、気温の微細な変化を捉えるようになったのだと思う。そして、欧州での日々を、この土地に堆積された長大な時間の中に自己を安住させることにより、心に深いゆとりがもたらされていることも大きいだろう。そうしたゆとりを持って初めて、小さな変化をつぶさに観察できるようになるのではないかと思う。余裕なく、こちらが動き回っているような状態では、おそらく変化する現象を掴むことはできないだろう。

動くものと並行して動いていては、その動きは止まって見えるため、変化の本質を逃すことになる。確かに、私たち自身も絶えず変化をしている存在だが、だからこそあえて立ち止まって自己及び外界の変化を捉えることが必要なのではないだろうか。立ち止まり、自己を観察し、世界を観察するゆとりを忘れてはならない。そうでなければ、内外の微細な変化など捉えようがないのだから。

© YOHEI KATO 2019

気温について思いを巡らせてみると、やはり色々な考えが出てきた。今日のフローニンゲンの最高気温は10度と暖かく、明日はまた最高気温が5度まで落ちるが、明日以降はまた最高気温が10度ほどになる。徐々に春が近づいてきた。

米国の詩人エミリー・ディキンソンが生涯にわたって詩を書き続けたように、私も日記を書き続けたいと思う。日々の日記が変化に富んだものになるのは、内外の変化のおかげなのだ。内外の変化の恩寵の下に、今日もまた変化に富んだ一日を十分に過ごしたいと思う。フローニンゲン：2018/3/7（水）07:52

2224. 研究と社会への関与

昨日に引き続き、今日も気温が暖かく、季節の変わり目に入ってきていることを知る。今日も午前中に一件ほど協働プロジェクトの案件があり、それが終わり次第自宅を出発して、「デジタルラーニングと学習環境」のコースの講義に参加した。

今朝は協働者の方から大変考えさせられるエピソードを共有してもらった。端的に述べれば、それは半歩先を見ながらこの世界に関与していくことに関する話題であった。そのテーマをあえて自分の話に置き換えるならば、研究上における仮説の立て方と研究そのもののインプリケーションをいかに考えていくかに繋がるものであった。

研究をする上で気をつけなければならないのは、現象の単なる説明で終わってしまうことである。つまり、下手をすると良い仮説がないままにデータ分析に着手し、単にデータから言えることだけを説明するような研究を避けなければならない、ということに改めて気づいた。

現象を説明するだけでは面白味に欠けるということは以前から感じていたことであり、仮説の中に驚きがあり、その仮説が正誤の検証を経ることによって、実務上の何かしらのインプリケーションにつながっていくことが自分の理想的な研究のように思える。

今取り組んでいるMOOCに関する二つの研究においても、とりわけこの点には注意をする必要がある。検証することに面白さを感じられるような仮説を立てることは、研究を進める自分自身を動かす要素になり、そうした仮説は往々にして、検証を経た後に実践に資するインプリケーションが得やす

いように思える。単に現象を説明することに留まらないことは、研究において非常に重要であろうし、そうした研究はまさに社会との関与につながっていくだろう。そのようなことを思いながら、講義に出かけた。今日の講義では、私の研究アドバイザーでもあるミヒャエル・ツショル教授がこれまで以上に活気に満ち溢れているように見受けられた。

毎回の講義内容は、オンライン学習と学習デザインの設計に関心のある私にとっては常に興味深いものである。一方で、全ての受講者の関心が高いかというとそうでもないというのがこれまでのクラスを通じて感じていたことであった。しかしながら、今日からはクラス内のダイナミズムが変化し、多くの受講者が積極的に質問をし始めた。それは、ツショル教授のエネルギーとも関係していたのかもしれない。

今日のクラス内容は参考になる箇所が随分とあり、それは今後オンライン学習プログラムを協働開発する際に非常に有益な知見となるだろう。このコースの中では、当然ながら種々の学習理論が取り上げられるのだが、そうした理論的な説明に加え、実際にオンライン学習プログラムを作る際に役立つ実践的な知識を得ることができるのは素晴らしいと思う。最終課題はまさに、既存のオンライン学習プログラムを分析し、改善点について新たなデザインを提案することが求められているため、非常に実践的な課題だと言える。今日はこれから作曲実践を始める前に、本日のクラスの振り返りを英文日記の方にまとめておきたい。フローニンゲン：2018/3/7（水）15:45

No.850: Morning Coffee in Spring

I'll start today's activities over a cup of coffee. I can feel the harmony between the aroma of spring and that of coffee. Groningen, 08:16, Monday, 3/12/2018

2225. 春の訪れを感じながら

ここ数日間はいつもより睡眠時間が長い。昨夜は普段と同じ時間に就寝したにもかかわらず、今朝の起床は七時前だった。私はよく、季節の変わり目になると身体の調整を経験する。例えば、自分の身体が新たな季節に向けての準備をするために、睡眠時間が長くなることがある。もしかするとここ数日間の現象はまさにそれであり、それはすなわち、新たな季節への移行を示しているのではないか。

天気予報では、今日は午後から雨が降るようであるが、気温は比較的暖かい。明日からは随分と暖かくなる。春の訪れを素直に喜びたいと思う。

今朝方も印象的な夢をいくつか見ていたのだが、肝心のそれらの夢の内容は記憶の彼方に行ってしまい、一方で、かすかに記憶に残っているものもある。

夢の中で私は、自分が通っていた中学校であろう場所の体育館の中でバスケをしていた。周りのメンバーの顔を見る限り、それは部活の最中であるようだ。

試合形式の練習をする中で、私は随所随所に「こうしたもっと上手くチームとして点が取れる」という箇所を見つけていた。チームを率いる立場にあるため、私は適宜それらの箇所を指摘するようにした。その都度ゲームをとめ、何をどのようにすればチームとしてより点が取れるようになるかを口頭で説明し、それを実際に示した。そのようなことを熱心に行っている場面が印象に残っている。

そこから何か重要なことを示唆する夢を見ていたことを覚えているのだが、その内容がどうしても思い出せない。無意識の深層に堆積しているものが、少しばかり顔を覗かせていたことだけは覚えている。今日のこれからの活動を通じて、もしかしたら突発的にその内容を思い出すかもしれない。そのことに少しばかり期待する。

今日はインターン先のオフィスに行く必要もなく、大学のキャンパスに講義に参加しに行く必要もない。一日中自分の書斎で時間を過ごすことができる。やはり私は自分の書斎にいる時が一番落ち着くことができるとつくづく思う。

小鳥が小刻みなリズムの鳴き声を奏でている。その声はとても透き通っていて、小鳥たちも春の到来を楽しみにしていたかのようである。そうした小鳥たちの鳴き声に耳を傾けていると、今日は書斎の落ち着いた雰囲気の中で自らの仕事に取り組もうという気持ちになる。午前中に協働プロジェクトに関する仕事が一件ほどあり、それは昼食前に終わる。

午前中と午後には、現在共著で執筆を進めている書籍の原稿を書き進めていきたいと思う。当初の予定では、今週の土日のどちらかに取り組もうと思っていたのだが、土日にはまた別の仕事に取り掛かる必要が生まれたため、できるだけ今日中に自分の担当する箇所の執筆を行いたいと思う。

執筆する項目についてはすでに明確であるが、その箇所を執筆するためには、前後の文章とその章全体の文章の流れを掴んでおく必要がある。そのため、まずは協働者の方が執筆してくれた文章を読み返すことから始めたい。

執筆がひと段落したら、昨日にダウンロードしたエリオット・ジャックスの論文を読み進めていく。ジャックスは精神分析学と構造的発達心理学の枠組みを用いながら、組織開発について研究をしていたカナダ人の研究者である。数年前にもジャックスの仕事に関心を持ち、彼の主要な書籍に目を通していたのだが、今日からは昨日にダウンロードした15本の論文を読み進めていくことにする。フローニンゲン：2018/3/8（木）07:38

No.851:Today's Work

I finished the data analysis with the third quantification criterion, which is course-related concepts. Interestingly enough, all of the results with the three different quantification criteria showed the same tendency between the fractal dimensions of the MOOC and two stats: (1) completion rate and (2) quiz scores. I'll carefully interpret the results next Friday and start to write an analysis report.

In the afternoon, I'll prepare for the meeting next Friday. In particular, I'll elaborate the report that includes the result of the first analysis. I'm going to make a brief oral report to my supervisors in the meeting. Groningen, 14:21, Monday, 3/12/2018

2226. 相互発達の生起する場

日々刻々とフローニンゲンは春に向かって進んでいる。それを証明するかのように、今日の気温も暖かく感じられる。実際には、今の気温は6度であるが、それでも十分なほどに暖かいと思う。徐々に春に向かっていくフローニンゲンの中で生活をしていると、日々の時間感覚も春のそれに変容しているように感じる。とりわけ、時間の緩やかなうねりを感じることがあり、その様子は「夢クラゲ」と形容してもいいかもしれない。時間にも暖かさを感じ、暖かい時間が海の中をゆらゆら漂っているような感覚なのだ。

今日は昼前から雨が降り出し、この雨は明日の朝まで降り続けるようだ。今週と来週には天気が崩れる日が続くが、それはおそらく春に向けた最後の転換点を意味しているように思える。雨がしとしとと降り続ける様子を眺めながら、そのようなことを思う。

今日は昼食前に協働プロジェクトに関する仕事があった。現在様々な協働者の方たちと複数のプロジェクトに従事させてもらっているが、毎回の打ち合わせでは新たな気づきを得ることがほとんどである。

「相互発達」という現象は、単なる概念では決してなく、それは疑いようのない現象として体験されることを日々感じる。打ち合わせの都度、私はそこで得られた考えを議事録にまとめることにしている。これは打ち合わせのみならず、発達支援に関するコーチングセッションの際には、クライアントの方とのやり取りで得られたことなどもメモするようにしている。

現在携わっている案件の一つに、マネジメント層に対する成長支援コーチングの提供と、そこから組織開発に関するプロセスコンサルテーションを実施するプロジェクトがある。相互発達という現象が生じるのは、何も直接的な協働者の方たちとのやり取りの中だけではなく、コーチングのクライアントの方たちとのやり取りの中でも生じる。今日もまた、自分が相互発達の場にいることに気づかされた。

学術研究にせよ、協働プロジェクトにせよ、私は相互発達が生起する場の中に絶えず身を置いているのかもしれない。それは本当に有り難いことである。

MOOCチームのリーダーを務めるトム・スピッツ氏から今朝方メールがあり、明日のコンテンツ開発ミーティングに急遽参加することになった。こうした場での協働作業もまた相互発達を促すものになるだろう。

日々の生活の中から相互発達に該当しない場を見るけることがもはや困難になっている。そうしたものを見つけようとする点に、私がまだ完全に相互発達の場そのものと合一化してないことが伺える。フローニンゲンが少しずつ春に近づいているように、相互発達が生起する場そのものとの合一プロセスも少しずつ進んでいくだろう。フローニンゲン：2018/3/8（木）13:57

No.852:Reflection on Today's Work

As I planned, I finished the preparation for the meeting next Friday. I revised the summary report for the first data analysis. The revision was done based on one of my supervisors' feedback.

Since I thought that I should have explained more details of the statistical analyses in the first report, I solidified the result section by adding more explanations. In addition to refining the report, I read a couple of articles about standardized dispersion analysis (SDA) that is one of the main methods in my research. The articles enabled me to refresh my memory on the procedure and mechanism of the method. Because I have to explain the essence of the method in the meeting next Friday, this reading was also a necessary preparation. Groningen, 17:44, Monday, 3/12/2018

2227. 船旅への憧れ

先ほど午後の仮眠を取っていた時、夢を見ない深い意識状態に自己が参入していた。ここ数日間、仮眠を取る際には毎回この意識状態まで自己が降りていく。

自宅にいる際に行う仮眠は毎回20分ほどなのだが、そうした短い時間の中で自己が複数の意識の状態を経験していることがわかる。特にこの数日間においては、非常に深い意識の層に触れている感覚がある。仮眠の終了を知らせるバッハの曲が流れる際に、世界がまた何か新たに始まったかのような感覚がするのである。

私は過去長らく座禅や瞑想を毎日する習慣があった。しかし、この数年間はそうした実践をあえて行わないようにしている。座禅や瞑想によって得られる効果から脱却し、座らずして同様の実践をするような日々が続いていると言えるかもしれない。とにかく、毎日座る自分はもはやいない。ただし、毎日の仮眠だけはもう十年以上にわたって続いている習慣である。

米国西海岸のベイエリアで生活をしていた頃、ヨガのインストラクターの資格を取得した。その時に用いていたテキストの中に、シャバーサナという屍のポーズが意識状態に及ぼす作用に関する解説があった。確かに私はもはや座ることをしなくなったのだが、最もリラックスできる屍のポーズでの

仮眠によって、知らず知らず複数の意識状態を行き来する鍛錬をしていたのかもしれないとふと思う。

先ほど仮眠から目覚めてしばらく経つが、自己が意識の深い領域でくつろいでいたという確かな感触が今もなお残っている。そうした余韻に浸っていると、雨がすっかり止んでいることに気づいた。天気予報とは少し異なり、今は晴れ間が顔を覗かせていて、暖かい太陽の光が書斎の中に差し込んでいる。どうやら夕方の五時までは太陽が顔を覗かせており、そこからまた雨が降るようだ。

昼食前にクライアントの方と対話をさせていただいていた時に、非常に興味深い話を聞いた。その方は過去に二度ほど長期間の船旅を行ったことがあるそうだ。その方の話を聞きながら、私も数年以内に一度船で世界を巡る旅に出ようと思っていたことを再度思い出した。

昨年の年末に、欧州から日本に飛行機で戻った際に、それが心身に与える影響が非常に大きいことに気づき、飛行機を用いた長旅をあまり行いたくないという否定的な観点から、船という移動手段に関心を持った。そこで以前に船旅についてあれこれ調べてみると、随分と色々なツアーが存在していることに驚かされた。タイミングとしていつになるのかは定かではないが、近い将来に船旅に出かけ、もう一度自己と世界を捉え直すような機会を設けたいと思う。

船でゆっくりと地球を回ることは、自己がもう一回転ゆっくりと成熟の方向へ向かっていくことにつながるだろう。世界の様々な場所を巡る船の上で日記を綴り、曲を作っていく毎日をいつか過ごしてみたい。

今日はこれから協働執筆中の書籍の原稿を書き進めていく。フローニンゲン：2018/3/8（木）15:31

2228. 二つの不思議な夢

早朝、目を覚ましてみると、少しばかりどんよりとした雲が空を所々覆っている。昨夜は雨が降り、その雨雲がまだ空に漂っているようだ。しかし、今日はどうやら雨は降らないらしい。晴れの中、インターン先のオフィスに向かうことができる。

まだ完全に日が昇らない中、空に浮かぶ雲は少しばかり黒々としている。そんな空を眺めながら今朝方の夢について思い出していた。

いくつか印象に残っている場面がある。私は、視界の遮るもののない雪原にいた。その雪原で、名前のわからぬ女性歌手と幾人かの友人とで歌を歌っていた。雪原の中に音響設備を備えた車が止まっていて、そこから歌う曲が流れてくる。

私たちは、基本的には車から流れる曲に合わせて歌っていた。この時、雪原の中に立っている皆の位置はバラバラであり、各々は非常に離れた場所に立っていた。中には百メートルぐらい離れた場所に立っている者もいた。

リハーサルとして一曲を歌い終えた後、経験豊富な歌手の女性が、車から流れてくる曲を一旦止めて、アカペラで歌ってみることを提案した。その提案通り、今度は車から一切の伴奏が聞こえてくることはなく、私たちはメロディーやリズムに関する自分たちの記憶を辿りながら歌うことになった。その女性は歌うことを職業にしているだけあって、難なく歌うことができていた。一方で、その他の者たちにとってはアカペラで歌うことは非常に難しかった。

ある曲の歌詞の中に、「雪原の橋の下で・・・」という箇所があった。実際に、私たちが立っている雪原には橋があり、その下には大きな河があった。この季節はその河が凍結しており、橋と河の表面までの距離は相当にある。一人の友人とその歌手は橋の上で歌を歌っており、二人は橋から落ちそうなきわどい場所で歌い続けていた。「雪原の橋の下で・・・」という歌詞がやってきた時、私は二人のことを心配し、同時に橋の下を眺めた。

そこには雪で覆われた凍った河しか見えなかったのだが、河の下に何かがあるような気がしていた。一曲を改めて歌い終わった後、夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、小中学校時代の友人とサッカーに興じた後、夕食を共にすることにした。その際に、一人の友人がポケットから不思議なものを取り出した。一見すると、それはUSBスティックのようなのだが、スティックの片側には得体の知れないものが取り付けられていた。するとその友人は突然叫び声を上げた。

© YOHEI KATO 2019

友人:「ほらっ、やっぱり生きてる！動き出したよ」

興奮気味に友人がそのように述べたため、私はすかさず友人に聞き返した。

私:「何が？何が動き出したの？」

友人:「今、このUSBスティックの中で謎の生命体が生まれたんだよ」

私:「謎の生命体？」

友人:「うん、これ。スティックの表面に、この生命体が動いている様子が見えるよ。それと、ここに尺度があるでしょ。この尺度が最大値になったらきっと完全体になるんだよ」

友人はそのような説明をした。私も非常に関心を示し、そのスティックの表面に表示されている生命体の動きに釘付けとなった。そして、その生命体が完全体に向けてゆっくりと成長している様子がわかってさらに興味を増した。

私:「それにしても、完全体になるまで随分と時間がかかりそうだね」

友人:「うん、数十年か、下手をしたら百年ぐらいかかるかもね・・・」

私:「そのスティックを自分たちで持っていると危ないかもしれないから、どこかに隠すのはどう？」

友人:「いいね、そうしよう。そうだ！このレストランの地下に誰も使っていない棺桶があったと思う。そこに隠そう」

私たちはレストランの地下に降りていった。そこにはレストランで用いる種々の機材が置かれていたが、なぜだか部屋の真ん中にいくつかの棺桶が置かれており、それらは一様に埃にまみれていた。私たちはその中の一つの棺桶を選び、そこにスティックを隠そうした。

友人:「この棺桶、なかなか開かないな・・・」

私:「しっ！誰か来るよ」

レストランの地下に誰かがやってくる足音が聞こえた。その足音の主は店員のようであり、何か道具を取りに来たようだった。

私たちは棺桶の背後に身を潜め、その人物が過ぎ去るのを待った。私たちは気づかれることなく、その人物が立ち去った後に、スティックを棺桶の中に何とか隠すことができた。無事にスティックを隠し終えた後、私たちは足早に地下室を離れた。フローニンゲン:2018/3/9(金)07:07

No.853: Support from Distinguished Composers

I notice that several months have passed since I began music composition. Because I started it without any musical knowledge, I need more rigorous learning and practice.

Musical works that past distinguished composers created are my great teachers. Their music scores provide me with a tremendous amount of support. Groningen, 09:58, Tuesday, 3/13/2018

2229. 夢の解釈

起床直後はどんよりとしていた空も、七時を過ぎると青空が顔をのぞかせ始めた。雲の一部に朝日が当たり、その部分が薄桃色に染まっている。その雲はゆったりとした速度で空を歩いている。

今朝方見た夢についてまた少し振り返っていた。印象に残っているどちらの場面も大変興味深い。雪原の中にある橋とその下にある凍った河の情景が再び蘇ってくる。そして、凍った河の下には何かあるに違いない、と思った自分の直感について再度考えを巡らせていた。

結局、凍った河の下には何があったのだろうか？夢から覚めて一時間経った今も、それについて気になっている。

凍った河の下に未知なものが存在しているのであれば、それはもしかすると今後の自分自身であり、今後の自らの人生全体と言えるかもしれない。河の下には何か特定のものがあるというよりも、一つの得体の知れぬ巨大な全体があるという感覚がしていた。

部分ではなく全体。そのようなことに考えを巡らせていると、河の下に広がっていたのは、新たな自分という未知なる全体であり、新たな人生という未知なる全体だったのかもしれないと思う。

今日という一日の自分、そして今日という一日そのものは、部分でありかつ全体なのだ。部分と全体という二つの側面を持つ自分と一日が、今日もまた未知なる方向に向かってゆっくりと歩き出している。

二つ目の夢の場面で見た謎の生命体。そして、それを隠した棺桶について。二つが象徴していることもまた非常に興味深い。それら二つは間違いなく何かを象徴していると思うのだが、それは何だろうか。

ここでも、「仮にあの謎の生命体が実は自分という存在であったらどうだろうか？」というような問いを立ててみた。謎の生命体がゆっくりと成熟の方向に向かっていく姿を思い出す。そして私の友人が、「この生命体が完全体になるまでには少なくともあと数十年、もしくは百年ぐらいかかるよ」と言った言葉を思い出す。あの謎の生命体が自己そのものを表しているのであれば、それが成熟していく時間の長大さにはうなづけるものがある。また、あの謎の生命体が少しずつ着実に成熟の方向に向かっていたように、私という存在も日々成熟の方向に向かっているのかもしれないと思う。

一方で、「そうした謎の生命体を棺桶に隠した意味はなんだったのか？そして、あの棺桶は何を象徴していたのか？」という問いが新たに立つ。前者に関しては、もしかすると生命体というオープンシステムに対して、あえて外界に開かれすぎることのない場所を提供したのかもしれないという考えが芽生えた。基本的には、生命体というオープンシステムは外界との絶え間ない相互作用によって発達を遂げていく。しかし、外界に対して無謀に開かれすぎているというのは、実は生命体の命を奪うことにつながってしまうことや生命体の生命機能を弱体化させてしまうことにも繋がりうる。そのようなことを考えていると、棺桶に生命体を隠すという行為は、自己の存在を外界に無防備に晒すことの危険性を暗示していたように思えてくる。

この現代社会は私たちに種々の開示を絶えず要求し、社会そのものも含めて、オープンであろうとすることをある意味強制している。無防備に外界に自己を開くというのは無謀な行為ではないだろうか。そのようなことを思わずにはいられない。

© YOHEI KATO 2019

最後に、あの棺桶は自己にとって何であろうか？ということを考えていた。それはおそらく、自己にとっての安全基地であり、それは今の自分にとって何であろうか。

ふと出てきた回答は、「それは物理的なものでは決してなく、自らの言葉の世界と音楽世界なのではないか」というものだった。自己の安全基地は物理的にこの現実世界に存在しているのではなく、自らが生み出す言葉と曲が作り上げる空間なのかもしれない。逆説的だが、それが棺桶として夢の中に現れていた以上、言葉と曲を生み出し続けることは人生の最後の瞬間まで自らが行う使命であり、棺桶の中から外に出る瞬間というのは、この人生を終えた瞬間なのではないか。そのようなことを考えていた。フローニンゲン：2018/3/9（金）07:46

2230. インターン十日目を迎えて

昨日は雨が少しばかり降っていたが、今日は快晴の空が広がっている。春の力動を感じる今日この頃。

早朝の天気は素晴らしく、穏やかな太陽の光を浴びながらインターン先のオフィスに向かった。オフィスに向かう最中、自宅にいる時に今日のインターンで取り組むことを確認していなかったため、今日なすべきことを歩きながら考えていた。

今日はまず最初に、MOOCチームのリーダーであるトムと共にコンテンツ開発のミーティングに参加する。もう一名コンテンツ開発の専門家がミーティングに加わるそうであり、その方とはまだ面識がない。ちょうど数日前にトムからメールがあり、このミーティングに招待をしてもらった。

基本的にオフィスでは、MOOCに関するデータ分析ばかりに従事しているため、こうしたミーティングに声をかけてもらえるのは有り難い。特に、MOOCのコンテンツ開発については以前から関心があったため、午前中のミーティングは素晴らしい機会になるだろう。ミーティングはランチ前に終わり、ミーティングが終わり次第、そこで得られたことを日記に書き留めておこうと思う。

昼食を済ませてから、近くの郵便局に行き、ある協働プロジェクトに関する書類を日本に郵送する。郵便局からオフィスに戻ってきたら、月曜日の続きの分析作業に取り掛かる。

月曜日に、二つ目の定量化基準によって3000個を越すデータポイントを持つ時系列データを作った。それに対して今日は、標準化分散解析という手法を用いてフラクタル次元を特定する。フラクタル次元の特定が終わると、そこからは先週に行ったのと同じ手順で、特定されたフラクタル次元とMOOCの完遂率及びテストスコアとの関係を調べていく。ここでの分析手法は非常に単純であり、相関分析と回帰分析を行っていく。

インターンも残すところ、今日を除いてあと四日となった。インターンの成果物として、ポートフォリオとレポートを提出する必要がある。その内容と提出時期について、手元にあるインターンマニュアルをもう一度確認しようと思う。それに合わせて、来週の月曜日に、インターンに関する評価ミーティングの日程候補をインターンのアドバイザーであるジャン・フォルカート博士にメールで確認しておく。

今、オフィスで流れているシューベルトのピアノ三重奏曲は実に美しい。私は普段、ピアノ曲ばかりを聴くことが多いのだが、ピアノ協奏曲も良いものだと改めて思う。今日はオフィスの中では、ピアノ協奏曲を中心に聴くことにしたい。フローニンゲン：2018/3/9（金）10:09

2231. 活気の良い朝

今週も静かに終わりに近づいている。インターンの十日目を終え、今日の研究も非常にはかどったことに充実感を感じる。

今日は曇りの予報が出ていたが、基本的に一日を通して晴れの時間帯が多く、オフィスの窓からの眺めはとても清々しい光に包まれていた。今日一日のことを少しばかり振り返ってみると、オフィスに到着し、一階にコーヒーを購入しに行った時、一人の女性が「ドアから外に出られない」と私に助けを求めてきたことを思い出す。

聞くところによると、彼女はオランダ語の教師としてこのキャンパスに来たらしく、外から中に建物に入れたのに、中から外に出れないと困っていたようだ。私は特に焦っているわけでもなかったので、彼女がやって来たドアの方に一緒に行き、そのドアの前に立ってみると、確かに中からは開かない仕組みになっていた。というよりも、特別な鍵がなければ中から外に出られないようだった。結局私は役に立てなかったが、その女性に遠回りをして目的の建物に行く方法を教えた。

一緒にコーヒーマシーンのところまで戻ろうとすると、偶然ながら開かないはずのドアの方から一人の女性がやって来た。見ると、その女性の手元には鍵があり、私に助けを求めてきたオランダ語教師の女性は無事にそのドアから外に出ることができた。

いつもとは異なる形で一日が始まったと思いながら、私はいつもと同じコーヒーを購入した。購入したコーヒーを片手に二階のオフィスに戻ろうとすると、階段を上った所に清掃員の女性がいた。

私と同い年ぐらいの女性だろうか、こちらから挨拶をすると、何やら朝食を口に入れた瞬間だったらしく、彼女は笑顔を浮かべながら身振りで私の挨拶に応えた。オフィスに向かって歩き出すと、清掃員の女性が後ろからドタドタと追いかけてくる足音が聞こえたので、その場で立ち止まった。そして、そこで立ち話を始めた。話し始めてみると、彼女は意外なほどに陽気な性格をしていることがわかった。

私の一つの質問に対して、彼女はいろんなことを話し始めた。私が一切質問していないことにも早口で色々と話し始める姿は圧巻であった。

聞くところによると――聞いていないのだが――、彼女には三歳と二歳の子供がいるらしく、週末に二人の子供を相手にして少しくたびれているそうだ。今日は金曜日であるから、彼女はどうやら先週末のことを話しているらしかった。

私:「それでも二人の子供は可愛いでしょ？」

清掃員の女性:「アウェアネス。神のアウェアネスのなのよ。友達も言ってたわ、二人は神と繋がってるのよ。それで私はくたびれちゃうんだわ笑」

最初私は彼女が何を言い出したのか、少し戸惑った。しかし、それまでのやり取りを通じて、彼女が高度な言語能力を備えた発達障害を持っているらしいことがわかっていた。また、「二人の子供が神のアウェアネスを持っている」という意味も十分に分かる気がしたので、そこからまた質問を続けた。特に、そうした子供たちと遊ぶことによってくたびれてしまうというのはどういうことかについて尋ねてみた。だが、残念ながらその回答は得られなかった。私たちはお互いに笑みを浮かべて、その場で別れの挨拶をし、お互いの仕事に取り掛かることにした。

なんだか今日は活気の良いスタートだったように思う。フローニンゲン:2018/3/9(金)21:16

2232. 小雨降る土曜日の朝に

十日目のインターンから一夜が明けた。昨夜は思考が少しばかり興奮状態にあり、就寝前は床の中であれこれと色々なことを考えていた。そこから一夜が明け、今朝は六時に起床した。一日の活動を開始した六時半において、辺りはまだダークブルーの闇に包まれている。明るくなってくるのはこれからのようだ。

昨夜から雨が降っており、今日も午前中と夜に雨が降るようだ。ただし、今日の気温はひときわ高く、最高気温は16度に達する。明日からはまた10度前後の最高気温になるようだが、気温も少しずつ春に向かっている。

昨夜の就寝前に考えていたのは、来季からの協働プロジェクトについてであった。すでに実際に契約をしているもの、まだ契約に至っていないものを合わせると、相当数の数に及ぶプロジェクトに関与させていただくことになりそうだ。

今お話をいただいているものに集中することが重要であり、これ以上プロジェクトの数を増やすことはできないように思われた。おそらく今は研究インターンで週に二日ほど終日身動きが取れない状況にあるために、そのようなことを思ったのかもしれない。だが、来季からもまた新たな研究を始めることを考えると、協働プロジェクトの数についてはもう少し慎重に考える必要があるだろう。協働プロジェクトと学術研究の双方を納得のいく形で進めていくためには、ある種の選択と集中が必要なのかもしれないと思う。

今朝起床してみると、昨夜にあれこれと色々なことを考えていた割にはすっきりとした形で目覚めることができた。

再来週に研究インターンが終わるまでは、少し過密日程が続く。そのため、今日と明日の土日においても進められる仕事は前に進めておきたい。具体的には、今日はゆったりとしながらも、それでいて現在取り掛かっている共著の原稿を読み返し、協働執筆者の方が作ってくれた企画書に目を通す。すでに原稿は全体を通して読んでおり、自分の執筆箇所の文章も数日前に書き上げている。

数日間文章を寝かせたため、もう一度自分が執筆した箇所に目を通そうと思う。企画書についてはこれから全体を読み、何かコメントをする必要があればそれを行う。

その後、六月にロンドンで開催される国際学習科学学会に参加するための費用の申請書を作成しようかと思っていた。すでに申請書自体は作成しているのだが、その他にも活動内容を説明する書類と担当教授の推薦状が一通いる。後者に関しては、現在の研究アドバイザーかつ今回の論文の協働執筆者であるミヒャエル・ツショル教授に執筆していただくことが決まっている。どちらもワード一枚ほどで充分とのことなので、それほど多くの時間はかからないだろう。ただし、こちらは提出期限まで随分と余裕があるため、来週の週末にそれらに取り掛かろうと思う。その代わりに今日は午後から、「デジタルラーニングと学習環境」のグループ課題の続きに取り掛かる。

先週にこのコースを担当するツショル教授から最初のドラフトに対して肯定的なフィードバックが返ってきたので、そのフィードバックを反映することと、続きのセクションに取り掛かっていきたい。

すでに今週の水曜日に協働者である友人のハーメンと執筆の分担を済ませているため、まずは自分の受け持つ部分の文章を書き進めていきたいと思う。デジタルラーニングの学習デザインに関する七つの原理それぞれを、対象とする学習コンテンツに当てはめながら分析することが今回のセクションの目的である。これに関してもすでにどのような文章を書けばいいのかのイメージがあるため、二時間程度を見積もっておけば良さそうだ。今日もまた着実に仕事を前に進めていきたい。フローニンゲン：2018/3/10（土）06:51

No.854: Japanese and English

Today was a very wonderful day, though the temperature was a little bit low. The sunshine was the apotheosis of beauty. I had no doubt about the expression.

After a class, I was walking around the center of Groningen. I was suddenly caught by the notion of the roles of Japanese and English in my internal world. I have no intention to write academic papers in Japanese, which should be done in English. On the other hand, I already know that it is still difficult for me to fully articulate my inner phenomena by writing in English, even if my

English writing continues to develop. My English is superior to my Japanese in the domain of academic writing, whereas my English inferior to my Japanese in the domain of personal writing.

It may be wise to separate both languages in terms of the roles. Another option would be that personal writing in English should focus on more transcendental phenomena that I'm disinclined to express in Japanese. Groningen, 17:25, Wednesday, 3/14/2018

2233. 研究インターンの今後の流れ

今朝起床した時に、なぜだか突如として、研究インターンに関して一週間多く働こうとしていた自分がいたことに気づいた。一週間ほど計算を間違えていたようであり、その原因として、本来追試がある週は大学全体が休みであるにもかかわらず、その週も私は働いていたことをふと思い出した。それを考えると、インターン先のオフィスに行くことは来週と再来週のみとなる。

気がつけば本当にあっという間であったように思う。オフィスに足を運ぶ日が後少しとなったため、インターンをどのように締めくくっていくかについて再度考え直す必要がある。特に、どのような分析レポートを関係当事者に提出し、どのようなプレゼンを行うかについて考える必要があるだろう。

昨日は、いよいよ三つ目の定量化基準を用いたデータ分析を開始させた。この分析が終われば、そこでデータ分析を切り上げ、それまでの分析で得られたことをまとめ直すことにしたい。すでに最初の分析結果については短いレポートとして関係当事者に送っている。その中でも、エスター・ボウマ博士から丁寧なフィードバックが書き留められたメールが送られてきた。彼女のメールを参考にし、二つ目と三つ目の分析に関するレポートをまとめていきたいと思う。

このレポートを作成することに集中するのが再来週となるだろう。来週の月曜日はオフィスに行くのではなく、在宅勤務で残りの分析作業を進めようと思う。これに関してはわざわざオフィスに行く必要はなく、自宅の書斎の中で十分に行うことができる。その分析作業を午前中に済ませ、午後からはボウマ博士から得たフィードバックを元にレポートを修正しようと思う。

ちょうど来週の金曜日に、インターンのスーパーバイザーであるジャン・フォルカート博士、エスター・ボウマ博士、MOOCチームのリーダーであるトム・スピッツ氏とのミーティングがあり、そこでこれまで

私が行ってきた分析の結果について報告する機会がある。月曜日の午後にはそのミーティングに向けた準備をしたい。金曜日のミーティングを終えてから、二つ目と三つ目の分析結果に関するレポートを作成し始める。今回のインターンで行った全分析に関する報告は、四月の第一週のどこかで行うようにミーティングを設定しようと思う。

昨日の早朝に、オフィスに向かっていると、河川敷のサイクリングロードの脇にある公園で、いつもどおり例の中年男性がトレーニングに励んでいた。気温が暖かくなっているためか、厚手のウェアではなく、少し薄手の赤いウェアを着てトレーニングに励んでいた。

昨日の朝は、両足を前後に振るレッグマシーンを用いて鍛えている最中だった。体格からするに、彼はアスリートではないことは確かだろう。おそらく、身体の健康維持を目的にトレーニングをしていると思われるが、それにしても非常に規則正しくトレーニングに励んでいるものだと感心させられる。赤いウェアを着たあのおじさんのトレーニング風景が依然としてまぶたに焼き付いている。フローニンゲン：2018/3/10（土）07:23

No.855: My Writings

I want to drown in my writings. That is my hope.

I have no specific intention to continue to write. Yet, continuos writing seems to represent my ceaseless life. Is writing here and there to live my life? It might be so.

I hope I can see the edifice constructed by my continuous writing just before I end my life.
Groningen, 17:31, Wednesday, 3/14/2018

2234. 期末評価の季節：フィードバックと発達段階

早朝から小雨が降り続いている。書斎の中には、昨日インターン先のオフィスでもずっと聞いていたシューベルトのピアノ三重奏が静かに響き渡っている。ちょうどこの曲が終わったところで、別の作曲家のピアノ協奏曲をかけたいと思う。シューベルトが残したピアノ三重奏は、そもそも数は少ないが、本当にどれも傑作だと思った。

シューベルトの曲を聴きながら、過去の日記を早朝に読み返していると、興味深い記事を見かけた。それは数日前に、私がフィードバックについて書き留めているものだった。その時の内容は、過去に作った曲に対して自分がフィードバックを与えるというよりも、作品を聴き直してみたときに、作品から自分へフィードバックがなされるという趣旨のものであった。

そもそも、フィードバックというのはこうした円環的な運動をすることを本質としているのではないか、とはたと気付かされた。つまり、フィードバックというのは、片方から他方へと一方的に何かを提供するのではなく、双方向のベクトルがそこに存在しており、双方の間で何かしらの授受が行われるのである。そのようなことを考えていると、企業社会においてはこの時期は期末評価を行う頃だということを思い出した。実際に、私のクライアントの方たちも期末評価を行うための準備に追われているという話をしてくれることがある。

こうした期末評価というのは、基本的にはマネージャーを起点になされるものなのだが、仮にマネージャーから部下に対して何かを一方的に伝えるだけであれば、それは真の意味でのフィードバックになりえないのではないか、ということを考えていた。

往々にして、企業社会で言われているフィードバックというのは、片方のベクトルしか存在していないのではないだろうか。であるとすれば、それはもはや本来のフィードバックの役割を担っておらず、それは単なる報告と述べていいものかもしれない。

フィードバックの意味付けに関しても、それは意味を構築する力の発達段階に大きく影響を受けるだろう。世間一般で言われているフィードバックというのは、往々にしてベクトルが一方向にしか存在しておらず、そうしたフィードバックのあり方というのは、キーガンの理論で言えば発達段階4のそれのように思える。この段階では、自らの価値体系に固着しているがゆえに、どうしてもフィードバックのベクトルが一方向になりがちである。すなわち、フィードバック先の他者から自己にフィードバックされてくるものを掴むことができないのである。

一方で、フィードバックの本来の語源にまで遡り、自己と他者との間でフィードバックの双方的なベクトル、つまりフィードバックのループが存在していることに気づけるというのは、発達段階5、通称「相互発達段階」と呼ばれる段階の認識かもしれない。

© YOHEI KATO 2019

対象が曲であれ人であれ、フィードバックの意味付けに関しては、やはり如実にその人の意味を構築する力の発達段階が現れるように思えてくる。フィードバックという現象について考えてみると、改めて非常に興味深いと思ったという点と、フィードバックという現象に対する意味づけは、やはり発達段階ごとに異なるという点が改めて興味深く思った。

早朝にコーヒーを入れている最中にそうした考えが浮かび、忘れないうちに書き留めておこうと思った次第である。フローニンゲン：2018/3/10（土）08:05

No.856: Writing

Like using an argumentation diagram, I'll link existing knowledge with new knowledge in my mental sphere. Writing can play a scaffolding role here. Only an argumentation diagram seems aloof and detached to me.

I need a story to engage myself in a specific subject. In that sense, writing instead of using an argumentation diagram will be suitable to me. It will be beneficial not only for enhancing my argumentation skills, factual knowledge, and conceptual knowledge, but also for cultivating my being. Groningen, 17:46, Wednesday, 3/14/2018

2235. 構成的意識の中で

時刻は夕方の六時を迎えた。今日は総じて非常に仕事がはかどる土曜日だった。

昨日の就寝前に「構成的な思考」が活性化されていたように、ここ数日間は意識内が活発に動いているように思える。こうした意識の状態は、この現実世界での仕事に取り組む際には有益である。とりわけ私が取り組む仕事の多くは言語を媒介にしたものであり、言語を司る能力とこの意識状態は密接に関係しているがゆえに、ここ最近の仕事がはかどっているのだと思う。

しかし、これは現実世界の諸々の仕事を進めていくために有益なだけであって、自己と他者によって構成されているこの現実世界の一歩向こう側の世界の中で安住することを可能にしない。そうしたことから、こうした意識状態は固有の限界を抱えていると言える。

精密時計を作るというよりも、生命を構成することを可能にするような意識状態の中で、午前中はいくつかの仕事をこなしていった。当初の予定では今日の午後から取り掛かろうと思っていたのだが、午前中に真っ先に「デジタルラーニングと学習環境」のグループ課題に取り組んだ。これは友人のハーメンと二人で取り組んでいる課題であり、先週の水曜日に話し合った役割分担をもとに自分の担当箇所の文章を執筆していった。当然テーマに依存するのだが、やはり私は文章を執筆するという行為そのものの持つ魅力に取り憑かれているようだ。

それが大きな建物であろうと小さな建物であろうと構わない。とにかく建築的に文章を構築していくことに対して、何にも代えがたい喜びを覚える。

今日から少しばかりピアノ独奏曲を離れ、ピアノ協奏曲や合唱などを聴いている。特にベートーヴェンが残したミサ曲を聴きながら英文の執筆に取り掛かっていた時に、背筋に立ち昇る物質的かつ非物質的なエネルギーを絶えず感じていた。

自分でも気づいていたが、四六時中薄気味悪い笑顔を浮かべながら文章を建築し続けていた。気づかないうちに自分の担当箇所の執筆が終わった。その後、何かを構成的に創造することに適した意識状態のまま、共著で執筆している書籍の原稿と企画書に目を通し、修正やコメントを加えた。これも午後から取り組もうと思っていたのだが、昼食前に全てを終わらせることができた。

この二つの仕事の合間に一度休憩として作曲実践に取り組み、一曲作った。昼食後にまた一時間ほど作曲実践を行い、二曲目を作った。夕方からこの時間にかけては、成人発達と成人学習に関する論文集を読み込んでいた。夜にまた続きを読み、もう一度作曲実践を行おうと思う。

今日は、構成的な意識の中で絶えず過ごすような一日であった。フローニンゲン：2018/3/10（土）18:17

No.857: Network-like Classroom and Team

Today, I was talking with my client about network-like teams. Quite coincidentally, I came across the same subject in the today's class. In the context of education, a traditional classroom is centralized around a teacher. However, this type of classroom is not so educationally rich. A

dynamic network perspective would be key to a new type of classroom. It is self-organized and de-centralized so that learners can show their autonomy and can acquire much more robust practical knowledge. Groningen, 18:00, Wednesday, 3/14/2018

2236. 絵画作品と人間として生きる日々

昨日のインターンの際に、MOOCチームのリーダーであるトム・スピッツ氏に招待されて、デジタルラーニングを専門とするヤープ・ムルダー博士と面会する機会を得た。そこでのやり取りはもっぱらMOOCのコンテンツ開発に関するものであったが、打ち合わせの最後に私の方から一つ質問をした。それは、ムルダー博士の部屋に飾っている数々の絵画についてであった。

オランダは本当に生活の中に絵画文化が根付いており、大学や家庭の中には絵画が必ず飾られている。現在私が住んでいる家具付きの家も、五枚ほど備え付けの絵画作品があった──それらはあまり自分の趣味と合わなかったため、持参した三枚の作品を飾り直している。

前の学期に「応用研究手法」のコースでお世話になったロエル・ボスカー教授の部屋にも興味深い絵画作品が何枚か飾られており、それらの作品ついて質問をしていたことを思い出す。ムルダー博士は私の質問に喜んでくれたようであり、あれこれとそれらの絵画作品について説明をしてくれた。

聞くところによると、20世紀の前半にフローニンゲンで活躍した絵画グループの作品らしい。色彩が非常に鮮やかであり、私が好む抽象画の要素が盛り込まれていた。中でも一枚ほど非常に気になる作品があった。私はムルダー博士の話に耳を傾けながら、フローニンゲンのどこかの風景が色彩豊かに描かれたその作品をじっと眺めていた。

今日も自分が今この瞬間に生きているのかどうかを確かめるような瞬間が何度かあった。大抵それは仕事の手を休め、書斎の窓から外を眺める時やトイレに行く時に訪れる。

欧州での生活を始めて以降、必ずやってくる自分の人生の最後の瞬間が妙に近しい存在になり始めている。そこには恐怖心というよりも、まだ見ぬ誰かを想うような気持ちがある。この気持ちとそれが引き起こす感覚は、この日常を見る目を確かに変えてくれているようだ。日々の日常が絶えず新

鮮に知覚され、時に一つ一つの現象が固有の輝きに満ちているように思える。今朝方、早朝のうらからかさの中に至福を見出したのもそれと関係しているだろう。

一体、人間として生きるこの日々は何なのかと絶えず問いかける自分がいる。様々な思念や感覚が絶えず浮かびながら、それでいてどこか一つの場所にゆっくりと還っていくような運動を見て取ることができる。結局自分はどこに行くのだろうか？フローニンゲン：2018/3/10（土）19:50

No.858: Dear Season

Dear the season that is oscillating between winter and spring, isn't the time for you to go to spring already? Groningen, 20:50, Wednesday, 3/14/2018

2237. 霧と白い光り

今日は非常にゆったりと起床した。七時前に起床し、七時過ぎから一日の活動を開始した。このような日曜日があってもいいと想う。

起床してすぐに気づいたのは、外の世界が霧に包まれていることであった。深く白い霧が辺りを包み、書斎の窓からはほとんど何も見えなかった。しかし、今は徐々に霧も晴れ、視界が良くなりつつある。

今朝方見ていた夢は、全体としての記憶は薄れているが、断片的にとても印象に残っているところがある。私は昔からの友人三人と一緒に、四人乗りの小さな飛行機に乗っていた。ところがこの飛行機は、空を飛ぶのではなく、パイプ管の中を進んでいた。ある箇所で飛行機が止まり、外に降りてみると、そこには比較的大きなスーパーがあった。

スーパーの中の品には全て英語のタグが貼られていた。そこから察するに、ここは欧米のどこかの国だと思った。実際に、スーパーの中には欧米人の姿をちらほらと見かけた。私は結局このスーパーで何も買わず、先にスーパーから外に出て、飛行機に戻った。すると程なくして友人が戻ってきたため、私たちは再び出発した。

しばらく機内で友人たちと話をしていると、再び飛行機が止まった。そこでもまた外に降りてみると、先ほどと同じスーパーがそこにあった。しかしよくよく見てみると、先ほどのスーパーとは何かが違うように思えた。

試しに中に入ってみると、今度はスーパーに置かれている品々のタグが全て日本語であった。さらには、店内の品々は、先ほどのスーパーよりも安かった。

店内をぐるりと一周してみると、そこには日本人の姿しか見れなかった。結局私はここでも何も買わず、スーパーを後にした。

再び飛行機に戻り、私たちは目的地もわからないままにパイプ管の中をまた移動し始めた。するとあるところで飛行機が何かにぶつかる音が聞こえ、突然止まった。

飛行機の先頭にある窓から外を見ると、どうやらパイプ管の出口に到着したようであり、そこはこの世界との結節点のようであった。だが、窓の外から光の指す方向を眺めると、パイプ管の出口と地上との高さの差はかなりのものがあった。

私はパイプ管を進む飛行機の様子を観察していた時、この飛行機は空を飛ぶことはできないと思っていた。仮にこの出口からこの飛行機が身を乗り出すと、空を飛ぶことなくそのまま地面に落下することがわかっていた。しかしそうした心配をよそに、飛行機はパイプ管の出口からじわじわと身を乗り出していった。私が懸念していた通り、飛行機は空を飛ぶことなく、地上に向かって激しい勢いで落下し始め、機内の中で私は死を覚悟した。周りにいる友人たちも同じ覚悟を持っているようだった。

私:「あっ、終わったね」

友人A:「うん、そうだね」

なぜだかわからないのだが、機内にいた私たちは、これから飛行機が地面に墜落し、全員命を落とすことがわかっていたのだが、皆いたって冷静であった。友人たちは安堵感に満ちた笑顔すら浮か

べている。私たちはどうやら死というものを超越していたらしい。ただし、私には一つ懸念していることがあった。

落下する飛行機の重力と速度を感じながら、この飛行機が地面に衝突した時、私たちはどのように死ぬのかということだった。つまり、いかように肉体が消滅するのかが懸念事項として上がっており、端的には痛みや苦しみを伴う死であれば、それは避けたいという考えがあった。そうした考えを持ちながらも、飛行機はみるみるうちに地上付近まで落下していた。地面に衝突するほんの直前に、突然辺りが真っ白な光に包まれた。

そこで夢の場面が変わった。

この夢について思い出してみると、どこか不吉かつ不気味なものが含まれているのだが、それでいて飛行機が落下中のあの安堵感はなんだったのかと不思議に思う。そして、飛行機が地面に衝突するほんの直前に見たあの白い光はなんだったのだろうか。

ふと顔を上げると、外の世界の霧がほぼ晴れていた。日曜日が静かに始まろうとしている。フローニンゲン:2018/3/11(日)07:38

2238. 哀しみの共有

昨日は随分と仕事がはかどったため、今日の仕事はゆとりを持って取り組むことができる。明後日に行われる協働プロジェクトの打ち合わせに向けて、こちら側で担当している部分の進捗に関する説明資料を作る。これはそれほど大掛かりなものではなく、PPTにして数枚ほどのスライドである。昨夜もそれに取り掛かっており、今日はそれを最終版に仕上げたいと思う。

午前中に一件ほどミーティングがあるが、それ以外は今日取り組む予定の仕事はない。そのため、残りの時間は専門書や論文を読むことに多くの時間を充て、それに並行して作曲実践を行っていきたい。もし可能であれば、今日は久しぶりに和書に目を通したい。仮に和書を読むのであれば、福永武彦氏の小説作品を選びたい。読みかけの全集が書斎の机の右隅に置かれており、今日はそれを手に取ってみるかもしれない。

先ほど、飛行機が地面に落下していく夢について書き留めていた。その夢について書き留めた後、さらにその次に見た夢の内容を思い出した。

次の夢の場面では、偶然ながら飛行機に一緒に乗っていた一人の友人と共に、非常に入り組んだ建物の中にいた。この建物はどうやらコンクリートで作られた巨大な家のようであり、家の中には無数の小さな部屋があった。それらの無数の部屋がこの家らしき建物の構造を複雑なものにしていた。その友人と私は一つ一つの部屋を回っていた。

とても殺風景な小さな部屋がいくつもそこにある。部屋の中には特にこれといったものは置かれておらず、ちゃぶ台のような小さなテーブルが部屋の真ん中に置かれているぐらいである。

いくつか部屋を回ったところで、友人が携帯電話を取り出し、誰かと話し始めた。話している最中の友人の顔はなぜだかとても神妙であり、話し終えた後の友人の顔には哀しみが宿っていた。しかし、友人は少しぎこちない笑顔を振りまきながら、「よし、続きの部屋を見ていこう」と述べた。だが、どうも友人の様子がおかしいので私は彼に尋ねてみた。

私:「何かあったの？さっきの電話」

友人:「いや、何も・・・」

私:「どうしたの？」

友人:「母が先ほど急逝したらしい・・・」

友人がそのように述べた時、突然私たちの横に高校時代の英語の教師が立っていた。どうやら先生はその事態を知って、友人の元に駆けつけたようだった。先生は友人にその悲報について悔やみの言葉を述べていた。しばらく私たち三人はその場に佇み、そこからまた友人と私はこの家の中を歩き始めた。

友人と私は終始無言であり、涙を流す友人の背中をさすりながら私たち二人は歩き続けた。その時の私の思考と感情は全く逆の内容を持っていた。一切哀しみを感じない思考と友人と同じぐらいの

哀しみを覚えている感情。その友人の母には幼少時代に随分とお世話になったこともあり、その時の記憶が次々に蘇ってきた。友人と私は哀しみを共有し合いながら、ただ静かにゆっくりと歩き続けていた。私たちにできることは歩き続けることだけだった。フローニンゲン：2018/3/11（日）08:06

2239. 感覚的発見事項と対話空間

午前中、部屋の中が少し暖かく感じられたので暖房のスイッチを切った。しかし、昼食前にまた部屋の温度が下がっていたように感じたので、再び暖房を入れた。やはりこれからもうしばらくは暖房が必要なようだ。

先ほど昼食を摂りながら、微細な感覚的発見事項を言葉として書き留めておくことの大切さについて改めて考えていた。基本的に私たちは、毎日何かしらの感覚的発見を得ているはずだが、往々にしてそれらに気づかない。また、仮にそれらに気づいていたとしても、それを一旦言葉にして記録しておくということをしないことが多いだろう。何らかの実践領域がある場合、実践を通じて得られた感覚的な事柄をできるだけ言葉にしておくことが重要に思う。

これはこれまで何度も述べていることかもしれないが、再度その重要性について考えていた。感覚的なことを言葉にする意義と、言葉にしたものを記録しておく意義の双方を強調したい。

自己の存在を深めていくというのは、言葉を深めていくことであり、同時に感覚を深めていくことだろう。言葉と感覚の双方を深めていくためには、それらを深めていくための実践が必要になる。その実践に関して、私は書き記すというもの以外に優れた方法を知らない。

季節が春に向かうにつれて、冬とはまた異なる幸福感が自分の内側に芽生えている。ここ数日間は、至福な日向ぼっこをしているような感覚があった。今日はあいにく曇り空であるが、そうした天候の中にあっても小さな至福さを感じる。

鳥の群れたちが一斉に飛び立ち、曇った空を駆け抜けていく。鳥たちは曇った空と晴れた空をいかように認識しているのだろうか。彼らもまたどちらの空に対しても至福さを感じることができるのだろうか。そのようなことを考える。

午前中の仕事を通じて、対話空間を構築することの大切さと対話をすることそのもの尊さを改めて実感するような出来事があった。この人生において、他者と真摯に対話をするということ。それがどれほど貴重なことであり、どれほど尊いことであるか。

午前中に行われた対話を通して、他者と共に生きていくことの意味がまた少しわかったような気がする。それはもちろん、全体の意味のごくわずかの部分にすぎないかもしれないが、また新しい意味を見出したことに違いはない。人と人とが真摯に向き合う対話空間の中だけでしか起こりえぬ現象というものが確かに存在するようであり、ここにもまた様々な探究事項が隠れていることに気づく。

日曜日もこれから午後になり、午後からは作曲実践と成人発達に関する専門書を読み進めることを行っていきたい。フローニンゲン:2018/3/11(日)12:27

2240. 内省能力の発達・組織開発など

日曜日も夕方を迎えた。遠方の空に、灰色ではなく白い雲が一筋の帯のように連なっている。さらに奥の空は青く晴れ間が広がっている。

午後から夕方にかけて、貪るように成人発達と成人学習の専門書に目を通し、休憩としてボストン経営大学院教授ビル・トーバートが随分と昔に執筆した二本の論文を読んでいた。どちらの文献レビューからも多くの洞察を得た。一つは、通称相対主義的段階と呼ばれる発想の枠組みは、結局のところ、過度に文脈を意識した思考のあり方なのだと改めて気づく。

「真理というものは存在せず、真理は文脈に依存する」という発言は、相対主義的な段階でよく見られるものだが、この発言は確かに正しさを内包していながらも限界がある。

パトリシア・キングとカレン・キッチナーの内省的思考能力の発達モデルについて再度文献を調査していると、こうした相対主義的な発想の枠組みの限界は、複数の抽象的な命題をまだ一つに束ねることができていないことに由来していることがわかってきた。この説明はまさにカート・フィッシャーの段階モデルと相通じるものがあり、相対主義的な発想の枠組みとは、抽象的な命題という一つのシステムを複数束ねて一つのメタシステムを構築できない発想のあり方だということが見えてくる。

このところ、内省能力について再度関心を高めているため、キングとキッチナーの段階モデルについては再び彼らの書籍と論文を読み返したいと思う。

トーバートが他の研究者と共に執筆した論文を読んでいると色々と参考になることがあった。特にここ数年において、私は日本企業と協働する機会が多く、企業社会における個人と組織の発達現象について考えさせられることが多かった。ここで一度腰を据えて、とりわけ構成主義的発達心理学（constructive developmental psychology）と企業社会における発達現象との関係性を論文や専門書を通じて探究し直したいと思っていた。

1980年代の後半に書かれたトーバードの論文を読んでいると、組織開発（organizational development）の専門家の中で、発達（development）現象に関する知識が欠如していることは皮肉である、という記述を見かけた。この論文が書かれてから30年ほど経つが、今もその状況に変わりはないだろう。

発達心理学を学び始めてからの数年間は、私は企業社会のことをほとんど念頭に置かない形で探究を進めていたが、今は協働プロジェクトの都合もあり、そうは言っていられない状況にある。この状況を私は肯定的に受け止めており、日本企業との協働のおかげで、発達心理学、とりわけ成人発達理論の枠組みを組織人の発達や組織開発に適用する可能性と方法を日々模索することができている。

今日もこれから就寝に向けて専門書と論文を読み進めていく。小さく大きな社会に仕えていこうと思う。フローニンゲン：2018/3/11（日）17:26

No.859: Today’s Work

I’ll have a meeting in the morning about the progress of my internship. In particular, I’ll share what I’ve done so far. First, I’ve participated in various meetings about MOOCs, esp. contents development. Also, I’ve visited the recording studio. Joining meetings and visiting the recording site were helpful to cultivate my understanding of MOOC development.

Second, my main activity in this internship has been data analysis. So far, I've conducted data analysis in terms of three quantification criteria.

The purpose of today's meeting is to report the results of the first data analysis among three. This analysis focuses on the variability of sentence length in the targeted MOOC.

I analyzed how fluctuated each sentence length is and what the underlying structure of the fluctuation is. This analysis was done by standardized dispersion analysis. Then, I examined the relationship between the structure and two stats: (1) completion rate and (2) quiz scores.

After this meeting, I'll start to summarize the results of the other two analyses. Groningen, 09:45, Friday, 3/16/2018

© YOHEI KATO 2019